保存と振興のための団体

Associations for the Preservation and Promotion of Awa Natural Indigo

川 人 美洋子

主な三団体

1966年、徳島県では藍の栽培面積が劇的に減少し(栽培面積約40,000m²)、阿波藍製造業の伝統は危機的状況になりました¹⁾。そこで、その産業を復興するために、1967年から阿波藍に関するいくつかの団体が、設立され阿波藍を支援してきました。これらの協会の設立から1985年までに、藍の栽培面積は約5倍に増えていき、それ以降安定しています(図1)^{2,3)}。阿波藍のこの状況は、江戸時代とは比べようもないほど小さな規模ですが、ある種の復活だと言えます。つまり、阿波藍に関する団体の設立は効果的に働いたのです。

例えば、阿波藍の消費傾向は、その使い方の情報公開に強い影響を受けていると思われます。なぜなら、紺屋といった染工場以外では、阿波藍をどのように使って、どのように染めればいいのか、ほとんど知られていなかったからです。それが情報開示によって、阿波藍の使い方が、紺屋以外にも理解され、その消費を支えるまでになりました。徳島県

図1 藍の栽培面積の推移

MIYOKO KAWAHITO
徳島県立工業技術センター 専門研究員
工学博士
〒770-8021 徳島県徳島市雑賀町西開
11-2
Tel: 088-669-4711 Fax: 088-669-4755
E-mail: kawa@itc.pref.tokushima.jp
〈専門〉染色化学
〈趣味〉ホームスパン

阿波あい生産振興部会、徳島県藍染研究会、阿波藍製造技術保存会の三団体が、その情報開示に深く関わっています。阿波藍の復活に欠かせない団体だと思います。

徳島県阿波あい生産振興部会¹⁾

徳島県阿波あい生産保存協会(現徳島県阿波あい生産振興部会)は、1967年に設立され、現在も活動を続けています。徳島県庁の支援を受け設立されましたので、現在の事務局も徳島県農林水産部にあります。協会の設立目的は、「郷土産業であるあい産業の栽培加工技術の改善向上により、新用途の開拓需要の増大を図り、その名声を永遠に伝えるため、あいの生産振興を行うことを目的とする。」と会則に謳っています。

阿波藍の生産振興のために、藍植物の種子、栽培、加工に関することや用途開発の事業をしています。

種子に関しては、品種別種子を生産し、保存し、配布しています。種の配布と共に栽培条件も教えてくれますので、誰でも栽培が可能になりました。農林水産部が事務局を担当していますから、県内農業の現状の情報が豊富です。また、農林水産部内の研究組織との連携により、藍植物の栽培やその加工技術に関する研究やその成果普及(講習会や研究会の開催等)にも取り組んでいます。

用途開発は、阿波藍の需要増加に直接結びつきますから重要です。しかし、この会は営利団体ではありませんから、用途開発と言うよりは、むしろ用途開発のための情報提供に主力を注いでいます。製造工程や藍関連施設の地図が記

図2 パンフレットの一部分

載されているパンフレット(図2)の配布や問い合わせに応じています。藍の栽培や阿波藍の製造販売に関するデータ収集も、仕事のひとつです。

阿波藍の製造者(藍師)5名、藍染工場の代表者5名、地方公共団体関係者13名、および顧問4名で構成されています(2001年)。

徳島県藍染研究会⁴⁾

1977年に、徳島県藍染研究会が設立され、徳島県工業試験場(現徳島県立工業技術センター)に事務局がおかれしました。この会も前述の徳島県阿波あい生産振興部会と同じように、技術の継承と阿波藍の振興を設立目的に掲げていますが、阿波藍の製造技術や伝統より、むしろ阿波藍の新しい用途を探ることを重視しています。そのため、藍染に関する勉強会を中心に調査や情報収集に力を入れています。

事務局が工業試験場にありましたので、絞り染め、型染め、沈殿藍、チャンチン(伝統的なパティックの道具)を使ったろうけつ染め等の技術的な講習会が数多く行われてきました。講師に、国内外の染織の専門家をお招きしました。この会は、会員の会費で運営されている任意団体ですから、規模の大きい事業は経費面で困難です。それでも優れた専門家に講師をお願いできたのは、徳島に藍の調査に来られたときに、ご講演いただく形をとったからです。今までに、国内をはじめ、シンガポール、イギリス、韓国、台湾、マレーシアの専門家にご講演頂きました。また、染師でもある会長や副会長が、ボランティアで講師を務める場合もありました。

この会の独自の活動の一つに、藍建て講習会がありました。阿波藍を使った発酵建て技術は、染工場の技術で一般的ではありませんでした。しかし、この研究会では、初心者でもその技術を習得する機会が得られ、その点で、阿波藍の普及に果たした役割は大きいと思います。伝統的な灰汁発酵建てや簡易な発酵建ての実習を中心にした藍建て講習会は、10回以上開催され、延べ300名以上が受講されました。それぞれの会員は、習得した技術を、それぞれの仕事や地域の公民館活動に取り入れ、阿波藍を使った発酵建てを続けています。

また、徳島県内外での展覧会を通じて、会員の技術向上や阿波藍の広報に努めています。2006年には、阿波藍で染めた布を使ったドレスの展示会を開催しました(図3)。これらの美しい藍色のドレスは、会員が染色し、会員のファッションデザイナー島本幸代氏(fortune dress)がデザインし、製作しました。絹を中心に、綿や麻等の天然繊維を使ったドレスに、阿波藍の新しい可能性を感じました。

この研究会は、阿波藍製造者、藍染工場の代表者、藍染色家、地域の藍染グループのリーダー、大学関係者等で構成され、毎年会員を募ります。構成員は流動的で、多いときは100名を越えていました。なお、2007年度から事務局が徳島県立工業技術センターから四国大学に移りましたが、現在も活動は続いています。

図3 ファッション展覧会

阿波藍製造技術保存会^{5,6)}

前述の二つの会と比べますと、1978年に設立されたこの会は、最も明確に阿波藍保存と発展を目的に掲げています。阿波藍の製造技術は、文化庁から選定保存技術に選定され、この会は、その保存団体に認定されています。

ここで、選定保存技術について、ご説明します。選定保存技術は、文化財の保存に欠くことのできない技術又は技能で保存の措置を講ずる必要があるものとして選定されています⁶⁾。その技術は、モノを保存するために必要な直接的な技術(修理、復元、模写、模造等)と、保存修理に必要な道具や用具、その材料を生産する間接的な技術とに区別されています⁶⁾。2005年の時点では、その保持者52名、保存団体22団体が、文化庁から認定を受けています^{5,6)}。

阿波藍はそれ自体が文化財ではなく、文化財である染織品を保存するための染料として不可欠であると文化庁が認めたという位置づけです。認定を受けていますので、国庫補助金を得ていますが、その額は、十分なものとは言えません。会員は、阿波藍製造者4名、それぞれの後継者4名、徳島県教育委員会の事務官2名、上板町教育委員会の公務員1名、石井町教育委員会の事務官1名、および専門の研究員1名から構成されています(2008年)。主な事業は、後継者育成事業で、準会員である後継者は会員から直接、製造技術を学んでいます。

藍の館

阿波藍の観光の拠点として最も重要な施設が、1989年開館の「藍の館」(図4)です。この会館は、徳島県板野郡藍住町に現存する藍商奥村家の屋敷と、展示のための新しい建物から構成されています。藍商屋敷は、1808年建築の母屋、西座敷、土蔵、奉公人部屋、馬屋、寝床等から成り立っています⁷⁾。奥村家は、有力な藍商の一つで、これらの建築物から、その隆盛が偲ばれますし、その暮らしを感じさせてくれます。大門をくぐると奥に藍屋敷があり、そこに入りますと、阿波藍の商談のプロセス、例えば、阿波藍を買い付ける際の母屋での商談、西座敷で中庭を愛でながらのもてなし、二階の客間での宿泊という風なことが想像できます。奉公人部屋からは、そこで働く人々の生活を垣間見ることが出来ます。その空間の狭さや屋根裏へのはしごは、決して居心地の良い空間ではないものの、逆に辛うじて守られたプライバシーだったのかもしれない。

図4 藍の館

奥村家に残る豊富な文書の一部や阿波藍製造に使われた農具が、寝床や新館に展示されています。寝床に展示された木製の舟に、当時の吉野川の氾濫の大きさを感じます。寝床の一部には阿波藍を使った染色体験コーナーがあり、多くの観光客が楽しんでおられます。

開館年の1989年には15,475人が訪問し、1992年以降毎年30,000人以上の入場者があります⁷⁾。2005年までの記録によりますと、全入場者数は600,000人を超え、多くの方々がこの会館の展示を通じて、阿波藍への理解を深められたことでしょう⁷⁾。

三木文庫⁸⁾

三木家も奥村家と同様に有力な藍商の一つでした。1789年に江戸売場店を開設し、1841年の記録によりますと江戸店で一万八千両以上の商いをしたそうです。これを現在の貨幣価値に置き換えるのは難しいのですが、米価試算で1両=4万円、大工賃金で1両=30~40万円(日本銀行金融研究所貨幣博物館HP)だったそうですから、幅が広い数字になりますが、東京支店だけで、七億二千万円から七十二億円の取引だったと言えます。

さて、そのような藍の豪商だった三木家は、現在、化学品専門商社である三木産業株式会社へと発展しています。その総本店に残るのが、社団法人三木文庫です(図5)。1954年、三木産業株式会社創業280年記念に「三木文庫」として公開されました。1980年には、徳島県教育委員会から社団法人としての許可を受けました。

三木文庫の展示館には、約4,500点の藍関連資料に加えて、約30,000点の郷土史に関わる資料が展示および保存されています。これらの豊富な資料を拝見すると、三木家が阿波藩の財政にいかに関わっていたのか、認識せざるを得ません。残された資料から、前述しました当時の東京支店は、東京の経済の動向や政情を含む社会情勢、阿波藍市場の情報収集に努めていたことが推察できます。このような豊富な所蔵資料は全国屈指で、代表的な阿波藍の資料館だと言えます。建物は、三棟から構成され、本館

図5 三木文庫

の1階と2階に、三木家に古くから保存されてきた藍染の資料や道具、阿波人形など数万点が展示されています。

保存と振興のために……

阿波藍の保存と復興に決定打はありませんから、様々な取り組みが必要です。もし、現在の暮らしに着物が欠かさない衣服であれば、阿波藍の保存を、気にかけて心配することはないでしょう。まず、比較的安価な化学染料で染められた着物が増えるでしょうけれど、それに伴い阿波藍の需要も増えると思われるからです。阿波藍の着物が、着物のなかで欠かさないアイテムだった歴史は長いのですから、阿波藍染の着物が無くなるとは思えません。

しかし、現状では、阿波藍が着物だけの染料でしたら、保存は難しいと考えるのが妥当です。そこで、阿波藍を保存し振興するために重要な役割を果たしている三団体をご紹介します。着物以外の工芸的な利用や教育現場での利用等、新しい用途に向かって、それぞれの団体が単独ではなく、お互いに情報を供給し、共に活動し、継続していかなければならないと思います。

また、2つの資料館の役割も大きいと感じています。伝統の広報には知的な情報が欠かせません。どちらも、文献や建造物が歴史的に価値あるものとして評価されていますから、今後も阿波藍の拠点として不可欠な資料館であり続けるでしょう。

引用文献

- 1) 阿波あい生産振興部会総会資料.
- 2) Miyoko Kawahito, The Business of Batik-Proceedings 2009, Yayasan Budi Penyayang Malaysia 投稿中.
- 3) 全国繊維工業技術協会「繊維加工技術の歩み第34巻」(2008).
- 4) 徳島県藍染研究会会則.
- 5) 阿波藍製造技術保存会総会資料.
- 6) 文化庁文化財部伝統文化課「伝統の名匠第三回報告書」(2006).
- 7) 藍の館聞き取り調査.
- 8) 三木産業株式会社HP.